

抑
筆隨筆

十六吳

15
413



4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4

東野栗原先生著

朽庵隨筆

製本肆 崇文堂

中井文庫

四

柟葦隨筆序

卷之三

昔者洪景盧著容齋隨筆。稗官小說。悉皆可以備考證。則追筆之述。亦不可憚也。而有論經義以疏事理者。詳事物以闡微古者。或有詭怪隱僻更

卷之三
中井文庫

涉夷堅者。孟浪洋。後屬齊。
脩者。是隋雖作志為燕。
亦學問之淺深。識度之雅俗。
昭然而不掩也。夫隨筆之
述難矣哉。桺庵源信元字
伯任。今先甲斐國源氏數世

事鈴鎔。信充祖父朋英。字子
俊。少好學。長與一時知名之
士。周旋往來。友善。今學專
勉經術。未嘗臻乎唐以前。
謂粹友小說。信充幼承祖訓。
讀誦日數百千言。其十二歲

也。父和恒共來見余。出蘇陸
之文讀之。頗通其義。余奇之。
益勉強之。尔後讀誦不懈。十
九著上聖國史稿七十卷。余
聞之於堅田紀公。請祭酒林公。
貸昌平學印。御牛。大有取證。

叢。今年廿六。述斯隨筆。余
披讀之。其辨析事理。蓋似
顧炎武趙翼。抑亦論經義以
備徵古之類也。未嘗涉夷。望腐
詖。其論事定。確者。後年
蓋有改之。今姑亦存一通之誼。

而已。便斯隨革。亦不可憇也。
而知信充者。莫先於余。是余
冠一言於考瑞。而不拒之謂也。

文政己卯夏廿八日伊勢守堀田
一知書於金精館東窓



今より三年。僕の勢力のひくふやありき。御葬の
あつて。すこしてまつて。何うれのわこううつせん
致いはく。余をもむか。吾君の靈をこへて降り
ふ。よりとまの春秋ふとこたまへ。景の道をもじ
まよ。其名玉の下よどみろきよへ。余がたろろ
人下り。それもあとくからむれ。吾えよ主にゆる
き十年。あゝの意。乃ちうむ。いつくら
たゞまとなく。そこへゆく。翁も。といふ。まく
言いあ生へ。キレでモ。まくいはしや。せもく
掌者への師へあふきしほとある。嚴うて

浮浪

西原

そがれあつたり。たまひまきへへふ
うちわすくらうす。うきせらと解説く
のきほひとまつるをみつめり。あうとくとくのと
れことわるよれま。ほくまくをくまくいきくあ
うれ。おき語す。水はれ、不らふうしまれ。葉
落き根ふく。敵とまがものとわかれ、本
師のうじてたす。言ふあるをせねわく。さき
まつもいせぬれとい。ほ下し道このとつ
ふくあるべくか不平えど。伊えれ不うりもある。
たくところのまぐひ取たきくよのなれ。もう

太神

せとあぬきの道ふもキムヒイモぬくかし。
うだくすらふたきじらう。言ふとておちとが
うくまう。とれりきじらふあをれ。ふま
あとまは。むちとくう。おもくにけき占あれ
あくとまは。むちとくう。おもくにけき占あれ
うく。まふとくうとくうとえく。しもく。底
ぬき。此ころむくのきつてとくとく。本じてます
こ。いもくされつてふ一言うてよど。うふ
とくとく。とくとく。おがうれ。おもたくもがく

さきより。彼にのみちとあらう。夜とあはじよ
そつときす。はうす。斯ふわざかへいたまへま。
がくつ年日をもと伊ふ。またらうほくおし
ゆまく。余も意すちあへ。白弊、うそとせき。ひた
すりすり。柳奔。ちうるよむとせや。あらん。
ううよびすく。うむせらう三五セタ。ほくまか
かちよまむらうまじきのうく。不まれえすてせふ
あらう。不せん舍のあくへ。う情。

柳奔隨筆初編目錄

一論語 千字文

二憲法

三聖像

四釋奠

法隆寺金堂藥師像銘 同釋迦像銘

讚岐學校 尾張學校 足利學校 金澤文庫

五多賀城碑 多胡郡碑

六古墨跡



柳菴隨筆初編

上卷 源信充著

○西土乃書籍家先奉朝ノ傳來ヒテモノノ、論語千字文ニ
是百濟照古王の貢獻ヒテ所ナリ。古事記ニシテ、御ノノク、朝
ち矣ト、照古王坐ノモノの百濟トシ。、青古王トシ。歴代史略ト
濟蓋妻王子、延熹八年丙午正月立、建安十九年甲午九月薨、
立位四十八年トアリ。、參天時ハ、青古王のえと年ハ、奉朝歲傍
天皇三十五年ト商ニ。、それ建安十九年ハ、神功皇后十四年
スアリ。、これ古事記ノ所謂應神十六年ト先づト七十餘年
ナリ。、又按ト、青古王者、母弟入吉少王トシ。、魏青龍二年
甲寅立、晉太康七年丙午十一月薨、立位五十二年、是應神十六
年ハ、そのハ十一年トアリ。、是トもれハ、照古王ト吉少王のあや
リト、即我應神天皇十六年トシ。、晉武帝太康六年ト

七 古畫
八 古刻本
九 太子傳
十 宋板書
又如記

四天王寺三縄執行
臺所

佛執

あれも論語十卷と見えりバ漢石經久或ハ何晏集解本
すうを、その故ハ漢書藝文志入論語二十篇とありく、卷
教を記さじ是亦漢の時十卷本か事知る、その十卷本
ト考へ後漢石經を始とし、論語校勘記所引漢石經十卷、
據供遺隸釋所載石刻殘字とみれ此後何晏集解を以る、
石經より十卷とし、梁皇侃疏唐石經これかに、因云、二
卷と
をもへ抜勘記スリ所ち、十行本を始とし、この本、元微宏植慎
殷樹國駁讓貞懲崩完恒等字々外並加一墨圈と云、是宋板
ふる事知る、邢昺が疏を化モしきりますねべし、今博士家入傳入る集解本、
また、漢魏の遺傳あるを、當時ハ珍貴といひむる也とんや。

念秋

吾嘗く嘉僧寫本の論語影抄本を見たり、是禪澄なるもれ
写と所ふゝく、その本書ハ仁治三年又写と云う乃清家
本なり、また弘安寫本集解本、建武写本集解本をとる、これ
卷子をうて吉漢官が所謂卷子古抄本、雋板大字本、水抄
本、永源鈔本、清原宣賢本、國訓本、伊氏本、中々就く卷子本ハ、
太和四年出で、官丞相の名なりと傳へ、されど題跋
もなく、聖巒真跡の可否ハもくづく、貞和二年の題字あ
つまきハ、禮記の事も志緒さればされどりぬるく寫とれ
もの也、梓行の本ハ正平板、明應板、天文板あり、正平板、
據浦道

祐と人を抄刻ともうかう、そ乃板今尚存。——東都書肆
須原庄長氏衛叔藏せり。近頃市野克彦、板勘くく覆刻
と明應板を、周防の平武道と人を刻する所をり。その板式
ハ予が古刻書跋ふ詳くらべ、按へ清の錢曾、讀書敏求記
え得。高麗鈔本河晏論語集解。此書乃遼海道蕭公諱應官監
軍朝鮮時。得甲午初夏予以重價購之于公之仍孫不唐獲
一珍珠也。葉畫奇志。如六朝初唐人隸書碑版居然東國舊
紙行間所注字中華罕有識之者。詢為書庫中寄車。未二行云
課浦道祐居士、重新命工鏤梓、正平甲辰五月吉日謹志。未知
正平是朝鮮何時年号、俟續考之。是正平板落語の美
事ふく。錢曾う鑒識。千字文ハ先儒疑以為く、周興嗣う車
應神の朝小字事などを示す。是ふくらむと前筑後守源君美朝
臣ハ王仁が献う。一卷と聞え。ハ元將軍大甲翁、勅章
等の小學刀書をもうとを引傳へあやうし。や古事記

を撰ぐ。とひ、千字文傳うと後の在ち事ふくとく。ハ
彼王仁う來ア一時、論語并小學書一卷をもうとと聞え
一を今西へ行く所ふくらくとの献ア一小学書ハ、即今
考千字文の事なりと心得あやすりく、斯ハある勢なる
也。——同文通考とひ。それ本居宣庵ハ、李蓮が集註千字文
の序ハ、晉武帝時大士鍾繇是を造りとて、人よりく、晉
武帝と人を應神天皇も同時に當れハ、此時とて、千字文
アモハ、のむり、未審ト弘ア。次其後次第亂複しく續
玉くりを、遙乃後梁武帝が時人立つてど、顔を次々全

くへたりぬきび、每へ廣りく百濟あらうとも傳くうる
く、その後りとれるをや、古事記傳

碑難考ふ解レタ曰、淳化法帖、漢章帝書、今の千字文の内名
諸かれバヒ乃文、興嗣フ出アリトハ、誤あらんといふア、
信充フ管母アヘ、章帝書八十四字、淳化閣帖第一、漢章帝書、
鱗羽翔、龍師大帝、鳥官人皇、始制文字、方服衣、遐迩壹躰、周談
彼短、無詩已長、仄壁非尚、寸陰是競、孝當竭力、忠興溫若思、慎
於宜令學優登仕、撰職從政、都邑二京、背达面洽、淳渭既集、墳
典亦乃八十四字なり、日知錄入百餘字トスハ、何の帖ア出アリか
うよまアす、東觀餘論人、此書非章帝、然亦末代人作、但錄
精ながねべ、
書者集漢千字中語耳、歐陽公疑以爲、漢時學書者多爲此語

云くぞつ得アリとソウアリ、歐陽公、漢時學書者多爲此語、
ハアリ、辰宿列張の治ハ、周興嗣フ次韻アリ、羲之
ウ千字文アリ、周興嗣フ次韻アリ、事ハ、南史アリ、帝以
興嗣アリ、工、擢アリ、拜貟外散騎侍郎、進直文德壽光省改、武帝以三
橋、舊宅爲光宅寺、敕興嗣フ陸倕アリ各製寺碑、及成俱奏、以興嗣
所製、自題銅表、然柵碑碣、機魏文、次韻王羲之書千字、並使興
嗣アリ文、每奏アリ帝称善、賜金帛アリ、南史周興嗣傳、と見アリ、元王羲之
書アリ所、乃千文アリ次韻アリ、今の本アリ、元王羲之
書アリ本、漢の時アリとアリ、がく千字文、周

興嗣が似まとひうよあるど其乱くる事必知已

孟子云之小義之う書とあひて是ノ義之う似る所小あり次

文子云之、齋岡齊帖中に載する字う約九千
大尉、鍾繇千字文、右軍將軍、王羲之奉勅書、二
儀日月雲霧嚴霜夫貞婦繫君聖臣良尊卑舊別禮義矜莊存
而相欣離感悲傷岫號藝機解此勅豈踐食研喙徘徊貞潔
落葉稷稼穡困唐虞禪讓率賓歸德飛龍在田備書見已迄
多世秋毫席仰理誰適委翳渠荷附牒施修薪孔立升堂墳典
之盛李林梧桐新孰表正學優卿建紙墨左令詳觀藉甚母嫡
後稽仁連比堅顛神續特睦以受伯叔布嵇九波移爵取宇宙
玄黃歲盈餘吳列宿調陽岷崗珠劍岳蒙瞻身昆聆賜工指
枕故厥貢嶽云百雉活刺畫丹青漢宮稱職盡忠景行名傳
秉直詩讚白駒羣賢轉植魏假密蹕途惟靡恃拱平章男女承
端谷聲虛積容止溫清言辭宜政慎增情性怡糖惟房悅豫接

酒燭林侍中續御再拜並嘗旋璣睥朗魄曜懼驟的歷陳根輪
凌囊具象願熟獲捕莽抽早異享辱牆續徐守真驚寫傍啓隱
千輩鉅勿久牧用紫鼯殆批把駄躍超驥且韻執夕周幾嚴使
維賴彼田慕桓振將家更土蹄韓煥寓目登眠老少敷虔呂侯
和同殿丙公戚市寐綸巧佳俗利雨疏數亭杳冥吉砌臻濠浴
駐轂內岱敢達疑皆毛蕘答於侯陪嵌塲高茲院天墉歲愚
竹矩步猶陋嘉猷持物心動甲帳對楹樓觀磬蕭吹笙鼓趨伊
尹阿衡膺門錦邈史魚孟軻者躬銀素垣翁識誠廻顧丁晉屬
易口飲論車榮煥盜寧手賊釋耽招絳煌寵南寧納鶩肥惻陸
月朞韋即轎嗣驢殊石碣沙漠宣威我尋求吉寧沈默道遙讀
都邑才陰終時過所定來薦得羔羊淡師鱗潛鴻大住樹習寶
糜自肆懷縷銘翠邊州約晚法歌蕙珍難量鳳若竟右既集如
初亦聚予民興兵浩極化無不及元四塞宗廟效靈遐荒竭力
明王麥舉八方仰則誅斬牀道勸賞饗陟有功必美亡善可逐
藏足為柰結乃愛首被堯菜眾代萬海鹹騰東背屏芒推面字

汲井清水

夏陶西問筵梨伏據戎仙羌階蓋府身縣侈序軍國精志引要
文武斯妙五經星辰下照渭殊流河川交映富貴猶欲短長從
命賤惡並輕好謙敬能知任運官祿靜覽遊鵠居謝彼畏脇適
嘗燭祭煌祀床弦康絳姿淑每嶼義矣祐綾宣節恬等聞鉤誚
芥出制體歡鞠養基揖益兒奄弗切滿槐雨浮鍾舍羅思遣親
慶誤廣弁趙霸近耻其勉累奏志跡鑑象辯弁座信起取給資
糧恐年飄扇琴讌觴蘭草巨木筆懸闕暑往寒重永載成閨人
安業承匡園池城想獨釣茂松逸意曠氣東畢野畝勞色農食
黍馨火宴生飢膳霄摩王美飽才器談誠謹弱譽榮紡綺妾雲
士惶寂敷歌詠帝俊仕會朝審察法刑鳳翔律樂感禽獸先友
弟父慈子孝篤訓雅操庶幾庸禹通九郡沛滅秦羽傳說佐殷
洞庭遼遠謂詰助者烏哉乎也秘府乃瓢印晉齊固書之印羣
玉中秘の之印あつと、そのまゝ、觀此帖者必有宋及大明律之疑、
文不_レ始_ニ於梁人矣、米元章書家中韓、豈妄_レ許可者亦株此帖筆
力圓熟、定為右軍書、臨池之工、得不矜重、奉為摹範耶、摸庵老人書之、又江村消夏錄云、此帖在戴_レ曰紙本、高八

頭道

مُحَمَّد

七言

才長九尺三寸、元七十一接、計一百十二行あり、今齋同齊怡二百七行をうと、消夏錄又え、右行書二儀曰月、雲露巖霜、起字大如錢、至末尾滅秦及焉哉乎也等字、倍大渾圓、遒勁、筆力雄偉、前有雙龍奎、宣和鈐印、秘府瓢印、內教珍玩、哥府書画之印、希世之寶、黃綾隔水上、有御書瓢印、哥國奎章、項氏收藏諸印、張氏珍玩、楊氏家藏、後有明昌寶玩、秋壑圖書、鈐記、有宣和政和小奎、歐陽玄印、楊士奇印、覃抵有羣玉中秘、明昌御覽、平海軍郎度使之印、吳俊仲傑小印、鬱岡齋曾摹之入石、とある、高士奇がみちるうち本、即こ乃本も、原書とみえり、此は鐘繇之本行數とすべり、參差勢あへづべかよしむじや、鐘繇之本河淡海鹹の字わくして、周興嗣之本ふくらみられど、章草千文を以て、漢時千文ありと、とて證し、たが、あるので、且今の本と、章草千文をハ全く同じと、即全篇周興嗣が次韻をなれど、全篇周興嗣工出づりと人

龍ハ鐘繇千文ふ母をも熟字、悉く位置をもへてまじ
小々變を出一、これよ嵇琴阮嘯の句あるふくも知る
まづ、嵇中散と、阮嗣宗と、皆西晉乃始より生うる人されば、
漢人の知べよ所よあらざれど我きバ千字文を書ひ行
く事ハ遠く漢魏よ濫觴とて之をも、次顏率と成り
至、周興嗣を始としべし、鐘繇が車にと、宋史李至が傳と
玉壺清談ふまく、玉壺清談、興國中太宗曰、千字文車無
嗣次韻とあり、梁書下と王羲之が車をみくわんと、下鍾繇
う碑をへる何乃書ふらうきや、我きど先人載る王羲
之が千字文入、雙龍及宣和秘府等の印ある大宋元祐の印彼是を通考どろふ、鍾繇

車と羲之車かと、一すれ小似たり、殆ぶ又趙翼が陝餘羲考
ふ玉壺清談と南史とを列舉し、所謂鍾繇書者、宋人傳記之
誤ともいひ、又劉公嘉詒錄を引く、千字文、车梁、周興嗣、所撰、
而有玉右軍書者、皆當時集字歟也、按梁時撰千字文者甚
多、武寄自製千字文、命沈衆為之注、見南史沈約傳、又南平
王寄使蕭子範製千字文、命記室蔡遠為之注、亦見南史、此外
文乃東、范區くあして、周興嗣なり。
後の車も事ハ、長久れ巴ちふとし、古手ふらきバ右軍をも
集字考一とれくれりと見たり、それとも車朝小
はくあめ年月を以て推考する、漢魏の間千字文をも

行々有りもみれき、ハ、鍾太尉が左偽作ともといふ。章帝
書とつひもの詔トテ、ヨリ、其章帝書を取て、漢時千文あ
つゝトソ人をばり、後山劉氏の説ナリ、文献通考小、劉氏の説
文、卷以為梁毅騎常侍周無嗣所化然法
帖中、漢章帝已嘗書此文、殆非梁人作也、章帝書の説ハ、黃魯
直、跋、章草千字文曰、章草言可以通章奏耳、非章帝書也、知
錄、と仰り哉、トシカかかづくとてベト、から章草ハ、漢元帝時
黄門令史游が化す所のトドケ、張懷瓘が書断小みえより

是上宮太子世二歳の御時より、彼國隋煬帝大業元年也。

あまきりや、嘆魏の遺風を追ひ、六朝の文格の準もろき。事
知るべく、憲法の字法、漢魏よりあくとア龍ハとの第二章以、何人
非貴更法、非字を不字のざとく用た、是漢人乃格をうむ。
史記陣平世家入、為相非治事、また賈誼傳入、漢法令非行也
と見れど、これ不字乃法ナリ、其第三章入、君則天之、臣則地之、
之字を助字のとく用ひ、是論語入亡キ之命矣夫、家語入若性
命之形、融之不可易也、金縢入禮亦宜之、文王世子入冬亦如
之、史記入以人魚膏為燭度、不滅者久也、有之而詰耶也、
注一より、其四章入、上不礼而下非齊、下無礼以必有罪、不字を
無字のまゝ用ひ、是も周奏法ナリ、禮記三年間入、
無易之道也と云、表注入、無猶不とあるも、是等その大異ナリ、
その詳あること、別よ
愚注解注一卷あり、さてハ上官太子ハ、文字の大祖とも申
す。菟道稚郎子太子、よく典籍をよみ、から高麗無礼を
表を破らまうと、ア車書紀入みられども、文章の傳
わね、學問の祖と云ふよまされども、どうも文章ハ
不朽の盛事と云ふよ、どうもかくよまれども、今入於くを子ハ

御蹟を考へんもの、憲法をとて何をうむるべよ、支湯權
理玉籠らき／御書支湯山縁起入鈔出ちく、云、吾國佛法和
舊釋迦改俗情傲慢、就中、國臣守全、悖逆盈胸、尤曰柳掣、神道
合々、降邪徒、伏弘俗、遂利生、素懷、果弘通、革誓、云々、此時
勅謚ありく、御諱を東明山廣大田満菩薩と号す。是時
是即支湯權現乃御事すりゆく。善光寺如來と往復の御書法隆寺スありとく書籍ス思
善光寺如來と往復の御書法隆寺スありとく書籍ス思、存覺報恩記、鑑藏抄など
みえられ、ふふく、此外又太子ノ御書と云も、ありや
まうば法隆寺金堂坐藥師像後光銘、太子うやまとくべど、
東宮聖王大命とみえられバ、史官の筆かべ、よしに推
古天皇十五年八月廿日、此銘の字跡亦壽と云ひ
しまづ邊を邊入化きハ

千祿字書入邊邊上俗下正とみえられ、邊入化きハ、唐李邕
が牡丹詩と見ゆる所見く、此詔よりハ遙乃後す、因
李邕は岳麓寺碑と、邊入化と、褚遂良が哀冊文と、邊入化
を異眸と打つて、近よ千祿字書を見ねぬと、御を御入化
ふハ、王右軍が辭中令帖と、呂秀巖が景教流行中國碑入見
えり、孫子と古き、顏元孫ハ、御御上俗下正とへて、顔を
顔ふ化るハ、鍾繇が維摩經と、右軍が辭中令帖、顏真卿が麻
姑仙壇記と見え、与を興ふ化るハ、千祿字書と、與上俗下
正と見えり、また同様すとある、座釋迦佛光後銘、まの二つ
あもしハ隋帝入たゞし一勅書、藥師寺塔標照、これまれ平
城ノ京よりも一ノれども、四海ノ類ひすと寶なりと
いふと、源を引くが老子の遺教すらきるものあるをや、

三 法隆寺寶物入、賢聖瓢といひてあり。孔子と榮啓期とを
取れバ、かくハ名はまことある。うそたまへバ、聖像の
まことよハ是よもぐる。され西古ノ傳と乃ハ、
これ唐人の龜を本とし、本朝人ほもする所ハ隋の代より
まばらか。先づあきれたり。全うや聖像考一編著と
つ。長久ハもじ。

孔夫子

榮啓期



吉
福

然るゝ文學の士、公のかう歟德す。とくとまを、如人稀す、
然るゝ文士の力も、成り立つて居るを知人所す。
いづれぞ、泉を飲く源を悟る人の情意と云ふ也。それ後吉備
大内氏を仰仰、和わらず、
大内氏を修飾し、初く釋奠乃儀ハ定まつた。續日本紀、吉備公乃傳
みえ、今の大内、釋奠固はとうと三通じて、おもろを是
そ大寶の遺軌を想像とへ、菅家文草、仁和二年正月十
六日任讚岐守、四月別廟釋奠。今筆を生ず、一鶴一辣意如
泥縛廻蕭疎禮用迷と仰、とくとく、あみえ、墓京集下、金澤
文庫より釋菜あわて事を扱ひ、上仁和より不文の
あるつづき、邊々遠境とつゞく、文學の推進も所す。

(四) 學校釋奠乃事行シテ、史書シテのみえられども、武智庵公の翼賛
摺ハサフ。功ハサフとがハサフより大ハサフすれど、その年公の奉傳不詳
考ハサフを續紀ハサフ載ハサフとぞうハ何事ハサフ也、傳曰、伏寶三年七月徒為
大學頭、公屢入學官聚集儒生、吟咏詩書、被祝禮易、渝揚學校、
訓導子衿文學之徒、各勤其業、秋徂元年三月遷圖書頭、兼侍
從公朝侍内裏、撫候綸言、爰以其間檢核圖書經籍、先從王申
年亂離已來、官書或卷軸零落、或部帙欠少、公爰奏請尋訪民
間、寫取滿足、由是官書髮繫得備、とあり、乞入ハサフ、
是公あつて後斯道地へ墜ハサフ、今日より至れよとを得ハサフ。

釋奠執事儀あり。又、武智磨公乃勗書經籍を檢校等
らまくもあらへば、古へより元書の災とすとく、亡失の事
へくどくくどくや、よび石上宅嗣卿乃茲亭、續日車紀ふ、捨其
曰宅以為阿蘭寺寺内一隅特置外典之院名曰芸亭如有好
學之徒欲就閱者恣聽之仍記候式以貽於後其略曰内外兩
門本為一軒漸極似異善誘不殊僕捨家為寺歸心久矣為助
內典加置外書地是伽藍事須禁戒廢以同志入者無滯空有
兼忌物我異代來者超出塵勞歸於覺地其院令見存焉臨終
遺教薄葬薨時年五十三時人悼之、經圓集に小山賦を藤原

賴長公乃宇治名寶慈、蓮華玉院の寶慈、宅嗣芸亭、宇治寶慈
の車ハ、一つも傳ひ
うと、蓮花玉院乃車の支ハ、辟高治要弟卅二の跋ス、以蓮花
玉院寶慈序車一枚并寫點了、直講清原第卅五乃跋、文應
之曆仲毛之律、為進上辛酉歲運勘文、卷花之次申出蓮花玉
院寶藏序車、校合寫點了、蓋是依報川使君開教余也、直講清
原抑くあるべく文應乃曳、寶慈へまく廢とさるよと知べー、其序車奥
書入長寛二年五月十五日正立位下行大内記、藤原朝臣表
周點進、まく裸短枝點進之、丁時長寛二年之秋也、河内守、從
五位上、藤原朝臣表、長寛二年五月十五日、叢位後五
周點進、まく裸短枝點進之、丁時長寛二年六月三日、點進之、元
位下、藤原朝臣表、徑點進、まく長寛二年六月三日、點進之、元
麥無然奉くと、文字多闕謬、頃雖刊正、猶有不通仍加抑紙粗
呈其所、教清原真人煥業を思ひたる意也、此序車ハ、長
寛元年入蓮花玉院造り出で、その年の年不、敷用等入延近
之寶物等散失支、ごつともみえ、玉葉集に、位乃序時、蓮花玉
院乃寶慈占ひ、芦田彦人筆を出され、正安二年の夏
のうち法皇得之勢玉人をみてみく、雍列府志入、寶庫無幾

而廢子今書冊、貼蓮瓦玉、武藏守泰時^ト、遺書を承^ト、東鑑
院之印者、偶致^トみぞり、月の候^ト。善信^ト文庫を構へ、東鑑、秉元二
年正月乃候^ト。或ハ帳簿の類、或ハ卷疏の類といへども、愛護の意ハ附れ、あるを有し
て、あるはう勢^ト、或ハ災^トかつて、言隻辭^ト傳^トねど口
晴^ト、さてハ越後守實時^ト、貯^ト一書^ト、とくを、今もすれくよ
は傳^トる。是實時^トが子顯時^ト、その子貞顯^ト、父子ニ連相続^ト、
學^トを好み^ト。故^トす。金澤の文庫乃至^ト、元亨三年、
稱名寺住僧^ト、結界化法面をうつす。文庫二つ、經藏一
つある。また古鈔本、法然諸燈錄乃歴^ト入、建武四年七月、得^ト

慧上人所集諸燈錄草本十八卷、從其初冬至臘月廿五日、與
同門宿老四五輩、治定之畢、更寫一本、藏武州金澤稱名寺文
庫者也。空元集入觀金澤義書而化とす、七言律あり、
もく、鎌倉大草紙入、武州金澤の學校ハ、北條九代乃賴昌の
むく、學問あり、舊跡ナリ、是を以て今度かの文庫を再建
して、種々乃耆籍を安置とみえ、また慕京集入、二月釋菜令
澤文庫入行ひ、きくともも、梅衣無盡藏上ハ、文明龍
集丙午十有八年小春廿有七己亥、進入金澤稱名律寺とし、
主下北條九代記入、越後守顯時、稱名寺ノ内ニ文庫ヲ立テ、

和漢ノ群書ヲ集メミトアシ、或ハ鎌倉志ト、貞顯の建テ
所トモムレバ、古き書トモ、何の時ヘ建トマツル證ハレ、
トモ群書治要ノ越後守實時の跋ありシ、それ首尾ニ金澤
文庫乃印あるバ、實時ノ建テ所トアシトナリ、群書
弟十五跋シ、此書一部、先年於京都書寫了、而當卷訛右京九
戌乾加點了、爰去文永七年十二月、當卷已下サク燒失了、然
間以康有之手、重書寫點校了、康有手者、以予之燒失く手、所
書寫也、于時建治二年八月廿五日、越列刺史押とあり、許定
傳等ノ書を按どうス、此年十月廿三日、於六浦別業卒と云
ば八月考頃ハ金澤了あり、亦同書弟十七跋シ、建治
元年六月二日、以勧卒、書寫點校終功、於此書一部夏、先年
後藤壹川爲大書左治之日、予依令誣所書寫下也、而於當卷
者、假藤三品戌乾加點手、令加點手、爰去文永七年極月、回祿成
孽化灰燼一早、今卒者、炎上以前、以予考勧令書寫之間、還又

以行奉、重令書寫者也、越列刺史卒とあり、是乃年五月、依所
勞龜告六浦と、許定傳入みるれば、此跋ハ金澤もく書たら
所ナリ、色し、かゝり、許定傳、明年五月、引舟元の内入、越後守
卒實時と載すル、又筆僕ハうへマジ甘えだらかづく聞れ、是乃
他の跋ハ、とくに筆僕ナリ、されど、其文庫元亨の時ハ三
記ナリ、所ナリ、似ねば略也、
舍あつて、應安の時、廢して、舊本のまゝ、上板憲實再興し、
文明の頃も、釋菜を執行して、來、來へつて、かく
而、駿府政事錄、慶長年錄、丙辰紀行、澤菴紀行など
小金澤卒乃傳くわる者、信充が親睹たるものと傳聞の者
と併せ、五羣書治要四十七卷、卷子、尚書

小山評二氏康

達義_宋校二十卷、十七冊、論語正義、_宋校十卷、左傳、集解鈔

_本卷子二十卷、

左平御覽、_宋校百十四冊、世說、_宋校三冊、外臺秘要、_宋校二十四冊、楊

氏家藏方、_宋校七冊、續易經方、_{金澤本}乃摹本、六卷、_宋校聖惠方、_宋校金

摹本、一百卷、四十六冊、續日本紀、法曹類材、卷二卷、續日本朝文粹、

卷二十二卷、清辭眼枕、_{金澤本}一冊、東鑑、應永十一年申中八

庫御本書、_{金澤本}一冊、東鑑、應永十一年申中八

月廿五日、以金澤文

三日點了、右金告板、_書、寃喜三年辛卯二月廿日寂有同廿

尉原奉重_本、病源候論、元宋景文集父選_本、不あく

不れど、それやハ、金澤文庫_本、後入ハ學校乃がくちあ

わらを見て、_本古海國人學校あり、七經孟子考文

すと入へども、國學の本ハ、令ふも見てねば、よくあひ、
贊岐州廟ハ、菅公の建たるゝとし、尾張の別廟ハ、大江匡衡
が建立した所と聞た、_本吏部集、是まれ國学の私議すと、
公乃定とハ聞えど、我り其跡_本もよくわづかず、足利宇
枝_本も、今上を國人あつて、其生焉_本もえ、ハ、鎌倉大豪紙、
極_本和尙家法和點_本も、我ハ小笠草の家塾_本も、我ハ上古國
學の遺制_本も、或ハ足利義兼_本の建立とア、其ト明證ナリ、姑
奥を構く本相通艦_本、憲實の狀を引く云、本朝州學存者、

有數鳥以僧為之主、野之學為最と云、また承享十一年
己未閏正月初吉、前房州刺史、藤原憲實と記すと云ふ、
學校入孔子見款器圖あり其裏書云承享十一年閏正月寄
進足利學校
事と聞た、大草紙入應仁元年長尾景久が沙汰せりと云ふ、政所
うちと今入所入移り建立しき、近代の同じハ快元より禪
僧をうよとれども、足利學校ハ古の學校の地入琳くと
あるべし、同書入此足利の學校ハ、と代承和六年より小野豊
上野の圓司ナリと云ふ、建立の所、同九年、豊陸奥ナリキテ

下向の時、此所の學問所をとてノアと曰く、文徳
實操を闇ともきバ、承和六年春正月、遂、御詔降、爲廢人、配流隠
岐國とあきバ、と野圓司ナリと云ひ誤ナリ、九年夏六月、
爲陸奥太守とあひども、此所の學校をとらへと因れし、東
海諸入分類年代記を引く、義兼の建立と云ひ、尊氏聖廟入
祈念と一事ナリ、續本朝通鑑入みぞれず、疑一桂菴
和尚が説入日本傳、足利處、學校學徒負笈之地也、と見く、後
阿寺四記入、學校興隆、左馬頭基氏奉行云々といへ、貞和の頃
より所見あり、室長東路乃はと、羅山文集、鶴峯文集、日光

纂

名勝志等五六所り、當時の至る所をみまつとれど、中々
貝原が記といふ詳たるよ似たり。

○多賀城碑ハ賴朝卿の書はくしてよく誂ト繪シテ、壺碑
あらとし傳へと爲シテ、今福島村に壺村也リヘア。此
碑明神鎮座すとをもくハ多賀城碑ハ自ら多賀城碑
トシ、壺碑とハ異なるべよ。因ニ、多賀城碑賴朝が位置、續紀
故京遺文より、多賀城碑ハ壺碑と、ぐわくちり
碑置く久也とぞ、多賀城碑ハ壺碑と、ぐわくちり
人乃ちくとく金子入、多胡碑ハそれと古くあつて、
知人よりまくとく、衝く長崎豫州を東洋ハカマヤーをとの

蓋簪録入記さうとうとあくびく人の知知といちくね、
山吹日記云、此碑の事を、西人、想ひをもつゝ、然く宗長が
ひと、本文の意とだれど、西人、想ひをもつゝ、然く宗長が
本路のはく、永正六年、をと川、並松別當す。群馬郡入あり、
並松、並木のあやまつさうり、同郡の地名なり、佐野
上人傳へり、並木堅者と/or/人主姓、先人ナヒ人主姓かへ
ねむられ行林りけり、此別當、俗、長崎、姓、石上也、並松、
國多胡船舟官荷、碑文略曰、大政官二品徳贊親王、大正
二位石上尊、此文多面有布帛社あるとされ、おもへば、李朝
石碑刀あき書入みえうちハ、ま乃多胡碑と號ともいはへ
し、因云、この碑文の中ふ、給半と入字あり、藤貞幹が信入、半
ハ半の字れんとづひ、あるハ半と入人あり、くまねふも

一そり、その年ハ、ひらく小幡氏の祖をひとひ源を清ハ、年
養相通して、給養をうころたり。食一とひ食す、それども續紀
ユ此都かよれしよと、何を教ろく記され候バ、今辨へが
あまきども至し、我中、此かとち都一つ給くらうてんふハ、小幡
あとみりあり候バ、聲えき其と力く、先後をあるさうをふ
く、何よりみえ候バ、給年の義リ今とシ、事たゞねむ地ども
穿くる說をなとば負輪が絶のよとく、半の字乃點畫を益
しなづくある。金輪ナラ、何とぞれバ、養養幸幸、摸益どもと
まれ唐人の筆ふくえり候、年年の模倣也、すうり、画一とハ
寔をうけり、いづれも成給半とをうて、續紀の嘉ス大がゆ
ス。

⑥平田寺勅書、弘福寺僧綱所務牒、東寺封戸牒、法隆寺獻物
帳のよとく、古墨跡ハ、佐史の為を一所をうべずれども、其
氣韻高尚ふく、愛まことし、紋章の規形ともい、捺印の制

度、これ唐人の為ト、ものと符を合せ、がまくおおハ
佐國へ準拠せしバ、一端をうるに足りず、こきぢりのう
れ齋檀の詩ハ、何とぞうそり宋朝入仕へり、ニ王の風
あやと称讚すをかく、景莘の墨跡の傳くらだらんハ
いづれうけし定をく淳化宣和の秘府、重護齋藏等ら
まくそハ金虜の奉庭へりて失れんものすら無く、或ハ
初音あくし、秘義愛きく、妙率ふきく、トウモ、今りハ
ソラまく、巖然へと見ゆどもハ、古人の賜もの、瞻仰をべ
く事じうちと、これハ事からうと、近世の好古がどに備

三とハレ一、古墨跡刀削カタシマの、二行三行ミツノウに截断
シテ、数種スレバある。すれども、今まとて、よりよきし、
鑒賞家カサガクの、紙、紺紙、金卦、銀界の、等あつて、アゲ上宮太子の御
経カニシキ、大秦カイの、廣隆寺カウリョウジの、經を截断カタシマし、成
り、アシナの、紺紙金泥カタシマキンメイの、塔の、下繪シモヂある。右は、また
り、ある。すく雲母地クモジの、唐紙カタシマと書かれ、あり。また白地、扇地紺
字カタシマズシ、大藏冠カウリョウコウの、經カニシキハ、赤地金泥カタシマキンメイ書寫カタシマの、經カニシキあり。多武峯タブニシマ切カタ
入スル、金唐草雲龍カウタウツウリの、下繪シモヂと紙カタシマ人ヒトが、またあり。白紙カタシマと金泥
入り、小行コウウ、紺紙銀泥カタシマキンメイあり。聖武天皇セイムカウノ御經カニシキハ、紺紙
入り、小行コウウ、紺紙銀泥カタシマキンメイあり。聖武天皇セイムカウノ御經カニシキハ、紺紙

金泥赤紙カタシマシラシと書かれ、あり。淡紫色紙カタシマシロシの、地黄紙カタシマイエロあり。光明
皇后カウゴン御經カニシキハ、紺紙金泥全界の御車カニシキ、カニシキハ、金界、小草小馬
乃江繪カウエイある。紙カタシマと書かれ、ゆゑ、砂子地カタシマシラシの、紙、白紙、淡紫色紙
奈良地カウラジの、金銀カタシマキンメイ小切符カタシマシラフを敷カタシマたるあり。蠟紙カタシマ、吉備大臣
乃江繪カウエイ、青紙カタシマシロシか、持カタシマそれあり。虫喰カウシ切カタと人ヒト、中將姬
八黃紙カタシマハヨウシと称讚カタシマハヨウシ淨去經カタシマハヨウシとて、御車カニシキとて、此格カタシマハヨウシよ
つゝ尋カタシマハヨウシ尋カタシマハヨウシされば、又カタシマハヨウシじ完書カタシマハヨウシとす。右は、左辰カタシマハヨウシ、す
ふべとカタシマハヨウシわらとカタシマハヨウシと、との内カタシマハヨウシ外カタシマハヨウシを終カタシマハヨウシて、左辰カタシマハヨウシだん
ハ、左辰カタシマハヨウシ勢カタシマハヨウシし、

七 畫乃古すきの、法隆寺ノ傳くもる、太子真嚴ノ過だるは
れ、大岡忌す、柏豎部子麿、僧雲徹、白加、高麗師齋等乃画師、
書紀小をひきめり、今の在ふ、そち名とく、人手従
ふちく、是百濟國阿佐太子乃筆たりとし傳へり、ちうそ
ありへば、獨我國ノ之こ寶とぞうにあく、次緝熙睿思ノ殿
より能く、およとねく、建業奉華すき氣を、おとむく、
じ、宇宙第一乃寶繪とく、金匱百重、緘藏とく、ま
寶蹟とあくすや、嘗て其影抄本を購求、浮く、編寫して
ちく出と、冠劍衣服乃制、當時の容儀を直視とべ、これ
は、東大寺鴨毛屏風乃繪、塔峯乃大織冠像、淡海公

上宮太子真像

信光繪寫



像當麻曼陀羅、これは千歳以とも古物よ／＼、水火乃災を
乃が終今ト傳くもあそり、そんちに降つてハ、金國、相覽、
常嗣飛鳥郡、公忠寺、筆ハ稀くよき傳くも、僅し繪所の
くの筆蹟れど、さと至れはくも珍つて、まことに藤貞幹、全
同ト、癖あつゝ、盡卷の目を掲釘ト、好古の才、弘くより、さ
むゞかず、もくわざれ物もくれ、うじど、余が見ト所を奉る
ト、春日社飭馬、三條院の御時、画ト、兜觀音縁起
中真言、嗣為塵卿画、伎、小堀垣、為家卿書画、同異本、豊後法橋、光明寺十
界曼陀羅、度思法眼、六波羅行幸、常盤の巻、二りとも、修元年
治の零年、度思時秋

詞を失うるゝあふ、産屋の絵、病のま紙乃残缺
忠、終ストリムに似もる
そのうやと、或へて、あるしハ、今の人々の筆によく画
おうおとく勢一物、栗田真ノ入唐番、是ハ吉備入唐と
もうよちく、信西栗田との人
ものたり、淡海公乃像、又母と、此類又へあ
らば、雪舟が明朝風俗の圖、ことよくりうきものあり、
⑧梓刻の本とハ、稱徳天皇の而萬塔ノ義らき、經、本と
まうハ御、吉陽山、承延二年三月、沙門延壽記云、承觀え
矣、唐日本朝、摺本寫本經編人師述、合東ハ千餘卷也
掌あり、承觀ハ、北宋の本平興四年とあられバ、此より唐本

とつへ、北宋本をちりとく、本朝乃擧本りあつまつまく聞
ゆきハ、寶龜板入はゞともれちる。一、因云、濫觴板入、擧本
年齋妙法頃、將來もとみてくらよ、ちくよ永觀乃時、一切經、寛和丁亥乃
唐本の擧本し、あまば、齋妙法よりも亦人まづく歟。其後擧本
の事、台記入見くまれ、宋板の高をつくる。すく、本朝乃
繡板入也、昔く傳ひ、紅バヤ、どりりと、今見くも古板ハ、
はれと人選擇集ちるべし、是土御門院乃御時入刻す。也、
卒基親乃序入へべり、是ふ次ぐハ、建保二年ノ明信比丘
が、觀無量壽經を自寫重刊ト、明信ノ本は、まことじと、是ハ
記云、校合倭漢數本、勘定釋義意訳、文字、之有無、次第之上下、
并點画闕行等、取捨、是非、若、有雖辨者、就多本用、所以恐錯

者也

朋

德

能

魯大守
望

難波
新地

延曆

正念が序に云々此本はもと原本をみどり思ひ
所へ寛永九年京都村上牛樂寺が覆刻本なり正安四年高
野山乃慶賢が御請来目録を刻し同年沙門知真が觀無
量壽經を覆刻し正和癸丑沙弥宗哲虛堂新添を刻し嘉
慶戊辰又尼如淨佛果老人心要を刻し同己巳年尼道證
慧照語錄を刻し高武藏守師直が首楞嚴義
疏注經を刻し觀應四年小尊氏卿大般若經を刻されま
れかくやまた外人慶應の圓悟心要貞和乃雲臥紀綱
貞和乃雪峰外集貞和乃景德傳燈錄正平甲辰坡浦道祐の

謬於卒士其功盈年月頑愚迷於寸心定以朋友爲弘通
陀車勸重刊板印矣願以此功德平等施一切同獲善提心從
生安樂國建保二年甲寅二月初八日畢此部筆功大蒙師誨
敬寫印字比丘明信とあきば是より亦うで入板本ありを
さ乃時行しひ刊行セハとちむ、又大僧正公名ノ大般若、吉良般若寺入
門を乞まじて文治人亦大僧正とあきば、貞應二年佛子貞榮
ま乃本寺それより前入ち承所引る也。貞應二年佛子貞榮
が慶圓と人の善提ノ為ノ大般若第五十ニを刻し良板般
若を乞、發云奉為孝多と人滅罪生善、愚刻當卷資役弘安二
年善提矣貞應二年三月廿九日佛子貞榮と書く弘安二
年秋田城今藤原泰盛が大日經を刻し發云為續三寶慧
廣施一善利益於一切之衆生是則守大師も遺誠偷令遂小
臣之心願謹以開印板矣弘安二年己卯四月日後土位上行
秋田城今藤原朝臣泰盛とあり同六年正金澤越後守傳心法要を刻し大
休

當番

進上

順 見
順 禮

圓珠經、文和の勅修清規、延文も楊仲弘集、景德傳燈錄、康安
の宗門十規論、貞治乃夢想圓師語錄、五燈會元、禪林類聚、應
安もア菴語錄、應菴小卷、寧禪師語錄、永和乃歷代編年互見、
永德乃宗派、至德の韓文、嘉慶乃柳文、冥樞會要、佛光語錄、明
徳の氏族大全、應永も三國佛法傳通緣起、佛祖正法直傳、無
文開、枯崖慢錄、大毗盧遮那成佛神寔加持經、宗派、顯戒論、微
翁語錄、大燈年譜、永享の慧照語錄、嘉吉乃大毘盧遮那成佛
神寔加持經、文明辛丑乃聚分韻略、同丙午の聚分韻略、延徳
乃慧照語錄、明應の二體詩論語、聚分韻畧、大永も貞永式目、

醫書大全、享祿乃韻鏡聚分韻略、天文考聚分韻累、難經俗解、
隋代序累、永祿多聚分韻略、韻鏡等、今之稀、人傳之、
古人用之乃切如切、瞻仰、目不移、全膚、古板乃跋
を數抄し、其刻手乃轉末を絳考し、古刻書跋四冊を著し、
より多くは、之を以て之を書き、或之を略して、

九 上宮太子乃御傳、最信トシテモ古事記ハ、法王帝說ナリ
調使麻呂、膳臣、二家の記述シテ、補闕記ニ傳シ
妙安寺ノ、調使麻呂傳シテ、假名左あミシ、平氏傳シ
トクニ譯セシモ也トキ、御子ハ、純子トシテモシ、平
氏

傳ハ、平素親が著ヒ所とづくとも、兼安乃奥吉ある。それ他種
本あり。基親うりふおもく出来しをれれるべし。それ御年五
十ト一歳より、繪傳よきくちくそ
記等乃ち書人ハ、甲午入誕生ありく、壬午ノ薨トも人と
云甚ば、満年四十九うそれもも人。紹運錄、皇年代記、ミ
サニ日薨、四十
九歳みえそり、膳夫人と同ト日ノ薨カニトハ殊
不大なり誤ナリ。法隆寺座釋迦詔文小、法興元年、歲次
辛巳十二月鬼、前太后崩、明年正月廿二日、上官法王枕病、弗
食于食、王后仍以勞疾、並著於床時、王后、王子等及與國臣深
念于食。

懼愁毒共相發願、仰依三寶、當造釋像、尺寸立身蒙此願力、轉
病延壽、安住世間、若是定業、以背逝者、往登淨土、早昇妙果、二
月廿一日癸酉、王后即逝、翌日法王登遐、癸未年三月中、如願
欲造釋迦尊像、并僕侍及莊嚴具、竟乘斯微福、信道知識現立
安穩、出生入死、隨奉三主、紹隆三寶、遂共彼岸、普遍六道法界
含識、得脫苦縛、同趣善提、使司馬鞍首止利佛師造、
說人此文を載ス、教曰、今依此詔文、應言、壬午年正月廿二日
聖王枕病也、即同時ニモテノオホトシ、之モ事大刀自得勞也、大刀自者、二月廿一日
卒也、聖王、廿二日薨也、是以明知、膳夫人先日卒也、聖王後日

益々

薨也、則證欽曰、伊我留我乃止、美能井乃美豆、伊加奈之女多
義氏麻之母乃山美乃井乃美豆、是欽者、膳主人、卧病而為臨
役時乞水、癸聖王不許、遂主人卒也、即聖王誅而詠是歌、即其
諱也、吉莖拾遺子之引所ハ、平氏傳多除毒也、、序岡山之食人遭
主事之來補闕記入みくわば古くよりつへまくらや、され
まし、其飢人多幸善歌ハ、太子薨ノ給ひとす、巨勢御林が
うゑの歌トシテ、帝悅ト、上宮薨時、巨勢三枝大主歌、伊加留
我乃止、美能乎何波乃多轄波許曾、和何於保支美乃、孫壹和
須良轄ま、美加孫乎須多波女佑美夜麻乃、阿遲加氣女、比山乃

金立 佛捨

報恩

麻年之志、和何於保支美波母、伊加留我乃已能加支夜麻乃、
佐可留木乃、蘿良壹留許等年支美少麻乎佑矣トあり、カウ
科照片岡山之歌ハ、日本書紀つゝえられども、古名問多と
ハ辛たゞヘテ、
和歌の博体の傳承

唐方寺人刺辛ハ、あつととけども、主神くより寺人也
くくねば、見し乍りキテ、五代をものゝ終くれば、天福
寺覆刹乃可洪青義トモ、主神くより遣おとや見キテ、主
後乃宗板の書トモとせよハ、いつくわふ、信充ぐみくも、
金澤文庫人傳くより寺人足利學校人傳くより書等ナリ、

日光 山門 志

標于三山之東牌弟十、乙未人日、子遹標於三山東窓、第十一、
 乙未正月八日、子遹三山東窓標、第十三、端平二年正月十日、
 鏡陽嗣隱陸子遹遵先君手標、朱點傳之、時大雪始晴、謹記
 一、王寅幼子承事郎知建康府溧陽縣主管勸農事子遹謹書
 一、子遹、陸子遹、陸務觀、渭南文集跋、嘉定十有三年
 一、嘉定十二年、為溧陽令、溧陽俗故武健而信滯祠巫覡有白
 云宗者、以妖術誘致良民轉相憑怙、子遹至遷興學校署禮讓
 譲民之秀者、教之而使勸化其愚謂諸巫曰、是不兩立、有我無
 君革乃誅、勤其魁者一二人、白雲宗所據民業悉歸其主由是
 新公署鄉傳橋路皆井然可觀、一、卷首入、孔穎達序、許出學校閨外、憲實碑、橫書、其
 標題、禮記正義卷第一、國子祭酒上護軍曲阜縣閤四子、臣
 孔穎達撰、謙弘等乃字閣畫也、每卷、是利學校之
 公用也、字連書也、第二乃主入、上校安房守藤原憲實
 寄進之、此卷閤副葉の裏面、冊の内と大書、

以文庫卒ハ亦入之、是利卒ハ上校安房守憲實、子子
 右京亮憲忠、その子五郎憲房、父子三世をほくし、愛護
 寶矣、ものゝゝゝ、其經史ハ、或ハ宋板、或ハ古鈔本、これ
 寄進の本卷秘冊あり、中入り、宋浙江板、周易註疏十二冊、即
 素子遹が傳標奉わる、憲忠が寄進するものゝゝゝ、嘗て此本を
 題し、卷あり、上校右京亮藤原憲忠寄進と書く、押字あり、其
 次入、陵子遹乃題字あり、第一乃末、其月二十一日、陵子遹
 三山東窓傳標、第二、端平改元冬十二月廿二日、陸子遹三山
 寫易東傳標、第三、廿四日、子遹標閤于三山寫易東傳標、第四
 五、甲午歲末、是五日、子遹東窓標閤、第五、甲午十二月癸巳、
 子遹三山東窓閤標、第六、端平甲午歲餘日、三山東窓子遹
 標閤、第七、乙未大基節、三山東窓子遹標閤、第八、乙未開歲五
 日、子遹三山東窓標閤、第九、端平乙未正月六日、陸子遹閤、且、
 陆子遹閤

右右二、總三十五冊、豐之後刈、万壽寺僧一華書補之、
一、又乃傍貼簽、郊特牲、內則、玉藻、正義此三篇缺卒、經自
八至九、正義自三十三至四十缺と記、松竹清風の朱印
あり、允ろ時ハ、此禮記四冊缺卒のま寄進し、後僧一華附叙
印卒を以て、補寫たり、其寫卒の首入、紫府豐緩僧一葉
學士、於武州勝沼、以印卒令書寫寄進、一度校合半トあり、
卒曲礼曰母不敬より、礼聞來學不閑徃教と云々と、卷と
一、道德仁義非礼不成より、詔之則掩口而對、
卷以ヒ、此卒陸德明奇義ナリ、紹熙の附發入、六經號義、自京
鹽蜀卒皆者正文及註、又篇章散亂、覽者病焉、卒司舊刊易書
周禮正經許疏、見一書、便於披擗、它經獨闕、紹熙辛亥仲冬
唐備負司寶、遂取毛詩禮記疏義、如前、三經、編彙精加讎正用
餽諸本、庶廣前人之所未備、乃若春秋一經、顧力主暇姑以貽
同志云、壬子秋八月、三山黃唐謹識、進士傳伯庸、進士陳克已
應賢良方正直、言極諫、科在治、修議郎、監紹興府會稽縣主簿高
似孫、修議郎、監紹興府三江錢清曹城鹽場管場袋鹽李日叢
迪功郎充紹興府府學教授陳自強、文林郎前台州二學教授
張澤、從事郎兩浙東路安撫司幹辦公事留駿、校正官宣教郎

兩浙東路提舉常平司幹办公事李深通直郎兩浙東路提舉
茶鹽司幹办公事王泓朝請郎提舉兩浙東路常平茶鹽公事
黃唐とあり、黃唐宋史上みど、二山志上、淳熙四年、車駕幸
大學上舍、釋褐黃唐字信厚、閩清人、授承務郎大學錄とみる、
又萬姓統譜上ハ、黃唐字雍甫、福州人、寧宗朝為考功郎中、時
韓侂胄為父誠陳乞、_ト益唐為覆議、乃見宰相京、諂言不能奉
承、因求去、とあれと同人がる、_ト、宋板影鈔本禮記、六十三
物、時ハ又當時力聞人とあらへ、宋板影鈔本禮記、六十三
卷、是ハ附釋音本下、毛詩註疏三十冊、詩緒序末上、大荒
略、板清板乃原書也、毛詩註疏三十冊、詩緒序末上、大荒
略下、一着絕句、春秋左傳註疏二十五冊、詩と古傳と、附釋音
訖、藤昂とある、謂南宋本也、且禮詩古傳、每本の格頂入、
是利學校之公用也、此書不許出學校閩外、上於安房守藤原
憲實寄進とありて、標紙上、松竹清風乃
印あり、即知表背トシテ、當時の者也、南宋本尚書正義八冊、
同時乃板本す、卷首上、端拱元年孔維等上表あり、次ノ
永徽四年、長孫無忌乃上表あり、今乃汲古閣本上、此二表をし

當日禮

その後、孔穎達が序あり。其卷首格項と、此書不許出學校
圖外。憲實押、ちり松竹清風の印あり。幸、他の書と不同。また
足利學校公用と題する事も、未だ本多如一。
卷末、上校安房守藤原憲實寄進と書たり。宋板巾箱本周
禮二冊、首入萬秀山正宗寺公用と志し。卷末、正宗寺書院
已六月晦、洛陽僧碌愚置之と志す。正寫本周易、王弼注、五冊、
卷末、易學之徒置之と志し。承
享九年の舊をさく、表紙とし、易解義疏六冊、王注の講義
書一冊、卷末、文明丁酉十一月廿一日始し、十一月廿七
日終し、清翠子と志し、莽萬と云ニ篆字の印を捺す。其講義
中八、當時の形勢を卦爻とあて論じ、多く鎌倉持氏朝臣
乃事なり、需のよ六爻、鎌倉ニテ易ヲ用時、我師ヲ喜禪ト云
タリ。其師ヲバ義臺ト云タリ。其喜禪ノ語ヲレタルハ、我易
ヲ傳ルトキ、鎌倉持氏ノ乱ニワガク、フノ時擇善天下ノ亂
ヲ失フ時、需ノ上六ニ「勿」アリ。有不速客三人来云く。自古以
來未見其可否、ノノ後ニ鎌倉ノナリヲ御覽セヨト云ハレ

官宿

タリ又
多納乃

タリ、又其後、重氏出頭ノ時、足利ニ於テ易ヲ講スル時、持氏
ノ時ノ墓ノ下ヲ沙汰スルニ、其占符節ヲ合セタルが如シ。
其故ハ、重氏出時兄弟三人不速來テ、重氏ヲ扶タリ、弟ハ美
濃ノ土岐ニ娘セラレタ、雪ノ下殿ト云タリ、一人ナリ、聖道テ
アツタズ、又ノ弟ハ、僧カ一人有、又重氏ノ一ノ兄が、義濃
ニアツタリ、其ハ俗人ゾ、以上三人來テ重氏ヲ扶タズ、重氏
ハ奇特ナリ、易ヲ信ジテ著ヲキラハ、違フハアルヘイズ
ツ、レムテ居ヲレタニヨツテ、貞吉ナリ、今ヘデ無為ナル
ニアツタリ、其ハ俗人ゾ、以上三人來テ重氏ヲ扶タズ、重氏
スメナリ、又ノサ氏、一定ナリ。即ち、おもろい者ト云重氏トあ
き、當時シゲ氏と私
き事、あるまうなづけ、断易、^寫六冊、已上二部を、學校入
泰軒周易傳、六冊、^{卷末、文明九丁酉仲春}書六冊、古文をも
すと在ス。當時史を補入べ、因云、成氏、或ハシゲ氏とも、
本高經集注、六冊、^{卷末、近江室理置之、肥後天矣とあ}天矣ハ、學校第二也、延徳年間入卒も、寫

辛毛詩十冊

鄭箋、卷末入、下野州足利學校常住、治之相因卜
隱軒主、心甫傳西堂寄附、慶長二十稔乙卯上已

後二日、董席鉄子叟寒松
野釋龍泓禪珠誌とあり、又一通、八冊、南宋左平禮記集訖、五冊
延徳二年土午立月廿二日、建仁寺大龍庵一牛藏主寄、能化
肥後之產天矣慈、また學校常住車陳皓車奥書云、延徳二年
立月廿二日、建仁寺大龍庵一牛藏主寄、至徳二年六月十
一日、以立象大外記家車、寫點了、永和二年立月二日、以此車
候、禁裏御讀訖、清原良賢天文廿四年勘之、百七十四
年也。もととよの天文以下ハ、九華老人乃葉すれべト。宋板
春秋左氏傳、十冊、卷首入、足利學校正傳院常住と總一、ま入
嘉定六年四月上解、三衢江公亮謹記と云々_{シテ}
識文あり、嘉定ハ、宋寧宗乃時の年
号すと云バ、まれ刊板の時すと云ト、寫本孔子家譜、二冊、永正
仲春日、寄進藤原
憲實押とあく、寫本古文孝經、一冊、寫本論語集解、五冊、圓
經と題し、またハ輶輶、またハ尺度權衡れど、論語乃美名を、五
山乃僧徒の筆し、題し、因ス、論語を名づけとスと

本朝文粹入、康保三年夏、右親樹源將軍招、翰林蔭學士、知讀
魯論語、アス、俗人未必覽知、以爲論語者幼學之書也、不足於
晚學、不知其先聖、微言、圓通如明珠之義と、源頤が文入見之
より、それより後、義經記入も出たり、そ乃圓珠と名附たる義八、
梁皇侃が義疏の序入、故言論語小而圓通有如明珠云々、也
あるより取きうりと、羣書一覽入、鄭玄疏を引く、而爲
すり、又六藝嘆詠と題す古寫本あり、そ乃者
六行十三字、徑註ナシ、所謂揚折本ナリ、写本白文
論、一冊、寫本論語義疏、十冊、首入、惠文庫
卷末入、丁時長享二年臘月日、書
文公家禮纂互集註、一冊、卷
之と志し、奥州天輔置鳥^ト行、
入、武州鬼玉黨、吾那武部少輔寄進、永正二年丙
寅八月日、野州足利學校、能化九天誌とあり、
豊城源明大昇校正新增とあり、集解
正義索隱乃序あり、十四行二十五字、正統本後漢書二十冊、
首入、此書不計出學校圖外、文選李善五臣註、二十一冊、每冊
上校五郎憲房寄進とあり、文選李善五臣註、二十一冊、每冊

金澤文庫乃墨印あり、又まゝ學校寄進、永禄三年庚申六月
七日、平氏政朝乃と行く、虎首、祿壽應穂四字印を捺す、又
隅州産九華行年六十一年時、歿於于鄉里、過相別、大守氏
康氏政父子聽三累講、後詔柄之次賜之、又請再集于講堂矣
とあり、その後又加朱鈐、鈐註蒙求一冊、卷末天正十年卯
墨点三要と記す、又、鈐註補註蒙求三冊、下野國足利此一部三卷書
寫し、沙門魯窮とある者又一通、四冊、鈐古註蒙求三冊、
鈐草集註千字文三冊、鈐草胡曾詩三冊、十八史略二冊、卷末
永丙戌小春日、藤原憲房寄附、藤公前年酉
三月薨逝、依遺命、今歲秋寄置、東井誌とあり、鈐草七書講義
十冊、卷末又、備隅州産九益子印一枚、校之、印草講義、後生
十冊、生殿令恩備一枚牛、瑞俊黙抄落丁落字補之、天正四年
子と題し、又後又、備胎後州人九海老牛入禮部韻略三冊、卷
落字、天正四年丙子之秋、雨燈前校とあり、禮部韻略三冊、卷
入、康正改元乙亥、南源寺是これ奇書乃典藉入、四海より
浦雲置也とある、是これ奇書乃典藉入、四海より

募もて千金をもつととよとよと得て一とハれびと、と
キ、上於憲實、関東擾乱の際、あくまく、學校を提舉し、
書を寄す、とづく管領の重任をとるまく、恭帝のとく、
遂に飄然と大志、長く名利の衢を振棄し、遠く西周
乃深門へ隠居し、また、連間を交をきら一とよの鶴東子
が五湖うねりとひ事かく、殊勝より優しくとよとよと
あふるき、作水亭の乱は、憲實、意より出しまよハ行く
どり、持氏滅しをもじり、趙舟弑君の義とあく、憲實
のよきかくくわざわせ故すまべし、

揭門初以爲知己易得。古人謂
千歲旦暮何其言之迂也。何則
不辨菽麥者。與畫墁瓦者。措而
不論苟濶獮于丈苑者。皆是知己。
我言是。彼亦領。安爲用千歲難
得哉。然亦以爲有張陳。有呂鄰。
管華。意趣之不同。終為仇讐。文
不可不擇也。友亦可容易也。漸

深察知己。義得者何謂。熟思古人。
執友之誼。倍疑往來者。相賣而
尊。否乎。柳峯居士。我歷世之通
家。假令意趣相背。不亦可相棄。
而意趣亦粗與余相同。嘗數其所業。
書畫與文章。子夫為政。釋
典與閑禪。我似有一日之長也。每
相言以拍掌。居士慙邇。余為緣山
事邪。

志。余謗引居士。為隨筆。二者同
意而為之。同時而梓之。居士序
山志。予題隨筆。二書之周。旋若是
相同。則所謂真知己也。而予至南
芝。居士居錢東。相去僅挾一江城
耳。安為用千里比肩哉。不亦大快
文政二年歲次己卯。首夏上澣

釋 捄門書于緣山北溪在心室。

本讀者夫僕之智道物腸前內口常叶
子者孝心恩旨者忠義恩詳力道宣
能知事淳了明至善度石利也

金昆羅大權現
受道神道佛道

文政三年庚辰九月發行
東都書肆崇文堂
東都書肆崇文堂

崇文堂

前川六左衛門

